

学位申請論文

審査報告書

2014年2月12日

関西福祉科学大学 大学院
社会福祉学研究科長 殿

学位申請論文審査委員会

主査 教 授 安井 理夫

副査 教 授 津田 耕一

副査 名誉教授 太田 義弘

下記のとおり、学位申請論文の審査結果を報告いたします。

記

学位申請論文提出者 西内 章

学位申請論文題目 ソーシャルワークにおける ICT を活用した
「生活認識」の研究

学位授与申請受理年月日 2013年12月20日

I 学位申請論文の内容要旨

わが国における急激な社会変化は、そこで暮らす人びとのライフスタイルを多様化させ、ソーシャルワーカーが、利用者の抱える生活課題の支援に困難を感じる場面も増えてきている。

本論文の目的は、このような状況に対応すべく関心を集めている専門多職種連携によるソーシャルワークを展開するためには、どのように ICT を活用すればよいのかを、実証的に考察することである。

その目的を達成するために、本論文では 4 つの仮説を設定している。(1) (価値) 支援困難を解決するためには、利用者の主体性と実存性にもとづき、生活情報を再構成することが必要である、(2) (知識) 支援困難を解決するためには、利用者の生活コスモスに立脚した専門多職種連携が必要である、(3) (方策) ICT を活用することによって、利用者のニーズに応えることが可能である、(4) (方法) ICT システムの有機的な活用には、専門多職種連携による生活認識が必要である。これら 4 つを検証・考察している本論文は 5 章から構成されている。

第 1 章では、まず、地域包括ケアシステムの構築が求められている背景のひとつである支援困難に着目して先行研究を概観したのち、支援困難は、倫理的あるいは客観的な立場からそれらを合理的に分析・説明し、支援方法をアドバイスするだけでは、事態は改善に向かわないことを指摘する。問題はむしろ、利用者、ソーシャルワーカー、連携している専門多職種間で生活認識のあり方が異なっていること、そのことに気づき共通の生活認識や課題解決に向けた協働につなげていくためのプロセスや方法が用意されていないことにあるという立場を明確にし、情報を整理し共有するためのツールとして注目されている ICT や、そのソーシャルワークにおける活用に関する先行研究を概観したのち、本研究の仮説・目的・方法を述べている。

第 2 章では、生活認識の基盤となるジェネラル・ソーシャルワークについて述べ、その発想や特性をもとにして ICT を活用する生活認識の視点を、(1)生活の全体性、(2)生活コスモスの認識、(3)実存性への視点の 3 つに整理している。そして、ICT の活用を、(1)利用者とソーシャルワーカー（教育場面では学生と教員）などによる二者関係での活用（実践支援ツールや学習支援ツールなど）と、(2)専門多職種連携によって保健・医療・福祉の機関や施設をつなぐ ICT システムとしてのパブリックな場面での活用とに分類し、それぞれの特性や枠組みについて考察している。

第 3 章では、専門多職種連携において ICT システムを活用して利用者の生活を理

解していく過程は、ICT システムの特性に左右される(1)生活情報入力局面、(2)生活情報確認局面と、専門多職種がそれぞれの専門性を活かして ICT システムでは管理されていない生活情報を補足し合い、より実際の支援に役立つような理解を共有しようとする(3)生活情報収集局面、(4)生活情報共有局面という 4 つの局面が循環するものとして理解できることを明らかにしている。つまり、ICT システムはそれ自体で完結していると考えるべきではなく、それぞれの局面において、支援に参加している専門職が協働して、情報を吟味することが不可欠であり、それらを通して、利用者の生活認識や、支援困難の状況などを整理でき、専門多職種連携がうまく機能し、支援過程が停滞状態から脱していくことが示唆されている。

第 4 章は、事例による仮説の検証と考察である。まず、二者関係で用いられる既存の ICT（教育支援ツール、チームアセスメント支援ツール）と西内自身が作成した「振り返りシート」を用いて、(1)地域包括支援センター以外で働いているソーシャルワーカーが困り感をもちながら支援を行っている事例と、(2) 地域包括支援センターのソーシャルワーカーが困り感をもちながら専門多職種連携を行っている事例（それぞれ 4 事例ずつ）について検証・考察している。つぎに、(3)ICT システムを導入している地方自治体の地域包括支援センターに勤務するソーシャルワーカーがそのシステムを活用しながら専門多職種連携を行っている 4 事例について同様の方法で検証・考察したのち、(4)最後の 4 事例では、これまでの知見をふまえて、利用者とソーシャルワーカーに、利用者の生活コスモスの観点から事例を振り返ってもらうことで、ICT システムや専門多職種連携の内容やあり方について検証・考察を行っている。

第 5 章は、本研究の総括である。第 4 章での仮説検証・考察をふまえて、(1)生活コスモス状況として利用者の生活を認識することで、支援困難が生じている状況を整理しとらえ直すことができる、(2)利用者のニーズに応えるためには、そのニーズに対応した ICT を活用する必要がある（ソーシャルワーカーや他職種が、制度によって異なるアセスメントシートや ICT を活用していた）、(3)ICT システムを有機的に活用するには、前提となる専門多職種連携による共通の生活認識が必要であり、さらにその結果をもとに ICT システム自体を改善できる仕組みが必要である、の 3 点を明らかにしている。つまり、支援困難を解決するためには、自分の力量を高める努力や専門多職種連携の展開、スーパービジョンの体制づくり、あるいは ICT 活用のシステムづくりなども必要であるが、これらは、あくまでもソーシャルワークを実践するための手段や条件にすぎず、一番重要なことは、ソーシャルワークの視野や発想をもと

にして、支援困難な状況をとらえ直すことであると指摘している。

最後に、本研究の課題として、(1)利用者や他職種が参加する支援展開では、既存のアセスメントシートや専門用語との関連をふまえて新たな支援ツールの開発が必要なこと、(2)それに加えて、入力しながら状況を振り返ることができるような記録の方法を開発すること、などを指摘して論文を締めくくっている。

II 学位申請論文審査結果の要旨

1. 本論文は、西内氏が社会福祉士養成教育や現任者のスーパービジョンに従事するなかで継続的に取り組んできた問題意識が執筆の出発点になっているが、そのまなざしは常に利用者支援のあり方や利用者の実存に向けられており、利用者に対するサービスの質の向上をめざした現実的で、有用な内容に終始している論文と評価する。
2. 支援ツールを活用した従来の実践事例研究は、ミクロからメゾの範囲（対人支援のレベル）を焦点にしたものが中心であった。本論文は、この範囲をベースとしながらも、さらにメゾ・エクソの範囲での専門多職種連携や地域での支援活動も視野に入れた理論構築や実践事例研究にも果敢にチャレンジしている。このような展開は、ソーシャルワーク以外の他職種との共同研究にも道を開くものとして評価できる。
3. これらの抽象的で多層的な内容についての理解を平易にするため、創意に満ちた作図や緻密な論理構造にもとづいた作表にも意欲的に取り組んでいる。また、全体を通して明快な論旨で体系的な考察が展開されており、論理的な思考力や構成本力などの点で評価できる。
4. 本研究でとくに評価できる点は、支援において ICT や ICT システムを活用する際の「人間」の営みが、プライベートなものからパブリックなものまで総合的かつ緻密に考察されていることである。近年、ICT に関する技術の発展やインフラの整備にはめざましいものがあり、モバイル機器の急速な普及によって私たちのライフスタイルや仕事のやり方までが変化してきている。

しかし、その可能性にばかり注目が集まり、限界についての検証は死角となっている感がある。ソーシャルワークにおける支援の科学化が声高に叫ばれているが、その基盤にあるのは生身の生活する人間であり、支援をする側も生身の不完全な人間であるということが忘れられてはならない。それらのうちの何を、どうテクノロジーによって補うのかという発想がなければ、科学化によって人間がかえって疎外されてしまうという本末転倒の状況を現出させてしまう。本研究では、ICT システムでつながった支援者と専門他職種、利用者といった支援の当事者たちが、生活コスモスをめぐる認識のずれを、教育支援ツールや振り返りシートを介してていねいに共有し、みんなが理解し納得しあいながら協働するための手順が活用方法として詳述されている。このような先駆的かつ本来的な意味での技術活用の研究は、テーマの社会的意義や研究方法の適当さという点で高く評価できる。

5. 本論文に関連して、学会発表が1席、論文執筆（査読付）が4篇、平成20年からの継続的な研究事業報告（分担執筆）が5篇の多くを数える。このような活発な研究成果の公表は、本研究が一定の社会的評価を得ている証左である。
6. 最後に、本研究の課題についてである。まず、研究方法の課題として、研究の中心テーマのひとつであるソーシャルワークにおけるICTシステムの活用に関する先行研究のレビューに若干淡泊な印象があることは否めない。また、研究上の課題として、本研究は既存のICTやICTシステムを有効に活用するための方法に焦点化されているものの、実践事例の検証方法については、説得力という面でさらなる工夫が必要な点が見受けられる。また、そこでの知見をもとにして、新規にICTやICTシステムを開発するためのフィードバックの手順や内容を明らかにするところにはまでは、残念ながら手が届いていない。ただ、残された課題意識も明確であり、今後の研究活動にこれらへのチャレンジを期待したい。

Ⅲ 最終試験結果の要旨

上記の学位申請論文審査結果のとおり、審査委員会は全員一致で本学位申請論文を博士（臨床福祉学）の学位を受けるに値すると判定しました。

Ⅳ 公聴会の日時

2014年2月12日

Ⅴ 審査委員会の所見

本学位申請論文審査委員会は、本論文が ICT を活用した専門多職種連携におけるソーシャルワークの支援方法に関して、新たな知見を提示した内容であり、博士学位に相応しいものと判断します。

以上